

立川町

THK

K-354

早坂台遺跡

現地調査説明会資料



早坂台の遠望

昭和 56 年 7 月

立川町教育委員会

目 次

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 調査の経緯	2
3. 調査の概要	2
4. 検出した遺構	2
5. 出土した土器	3
6. 出土した石器	3
7. 出土した礫・その他	5
8. 調査のまとめ	5

挿図・図版目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 発掘地区分布図	3
第3図 住居址平面図	4
図版1 遺跡の地表面と発掘作業・遺物の出土状況・土器の出土	7
図版2 土器の出土・石棒と掘石の出土・磨製石斧の出土	8
図版3 遺構の検出・出土した土器片の文様	9
図版4 出土した土器片の文様・出土した石器類	10

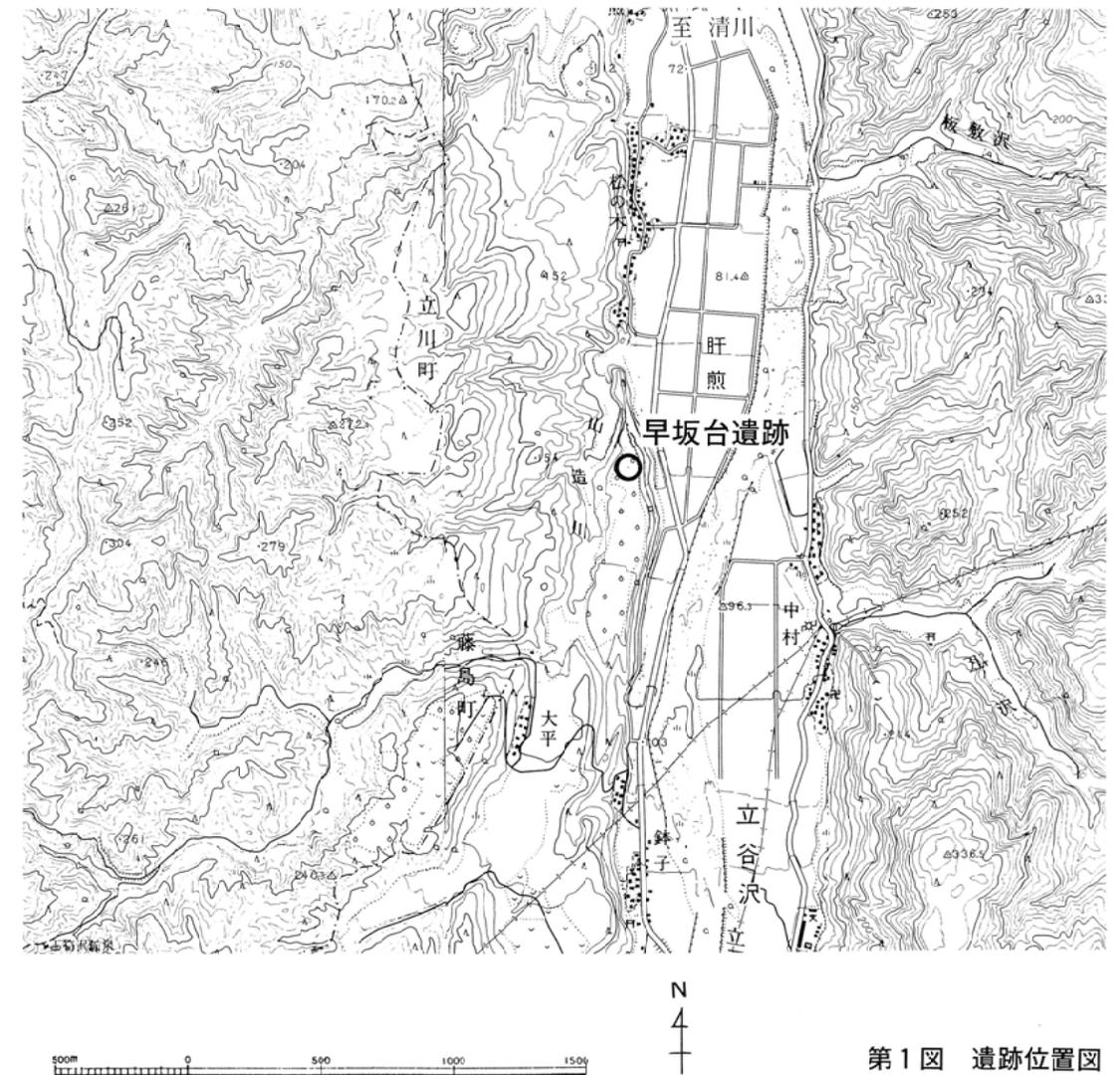
第二次発掘調査体制

遺跡名	早坂台遺跡	遺跡番号 1692 (山形県遺跡地区)
所在地	東田川郡立川町大字肝煎字早坂地内	
期間	自昭和56年5月11日～至昭和56年7月24日	
	現地説明会 昭和56年7月23日	
調査主体	立川町教育委員会	
指導機関	山形県教育委員会	
協力団体	鳥海砂利KK KK斎藤組 小林建設KK 松の木部落	
調査担当者	調査員 八木藤太	
	事務局 今田幸雄(社会教育係長) 阿部金彦(教育委員会主事)	
	石川精一(立谷沢公民館主事) 菅原昭治(教育委員会主事)	
	作業員 8名(男4名・女4名)	

1. 遺跡の位置と環境

当遺跡は山形県東田川郡立川町大字肝煎字早坂に位置し、陸羽西線清川駅より県道羽黒街道を南方に約5km地点の早坂段丘面にある。

この遺跡は標高130mで、低地面より約40mの段丘崖で面上に達する。台地面は平坦面で約11haの広さを持ち、僅かに西に傾いている。この早坂段丘には南にすべの段丘、北に精進場、七曲、大平等の高位段丘が連続し、いずれも遺物が出土し遺跡の存在を物語っている。(第1図・第2図・図版1-(1)参照)



第1図 遺跡位置図

2. 調査の経緯

当遺跡は昭和24年に食糧増産の国策によって畑地の開墾が行われて石器・土器片の出土があり、後に集落遺跡として山形県の遺跡名簿にも記載された。

昭和54年に水田基盤に砂利が多く機械耕作に支障が続出するため、松の木部落では水田の下の砂利を採り、これに代わる土をこの早坂台から採取して埋めることとなったので、県の指導の下に必要な手続きをとってこの事業を進めることとなった。従って当遺跡の緊急発掘調査の運びとなり、昭和55年5月11日に調査に着手し9月24日に終了を見たのである。(第2図参照)

この調査の結果、当遺跡は意外に良好な遺跡であることが判明したので、立川町では庄内教育事務所埋蔵文化財調査室の御努力や鳥海砂利KK、KK斎藤組、小林建設KK、及び松の木部落の御協力をいただき第二次調査の実施の運びとなり今日に至った。

3. 調査の概要

第2図にある通り、昭和55年の第一次の調査では東西に4m巾の溝を70m、40m、40m、40mと4本掘り、遺物・遺構の出土状況によりその部分の拡張を行いながら調査を進めた。

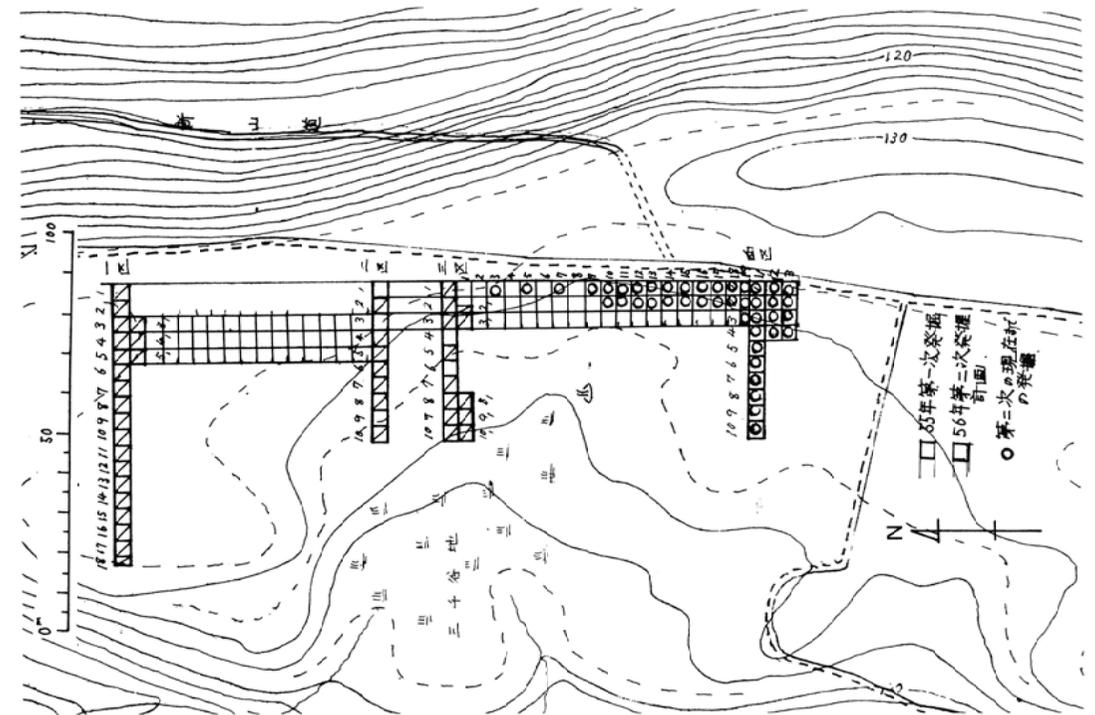
今年度の第二次調査では調査室の指導を受けながら、昨年調査した4本の溝掘りの地区を南北に連ねて遺跡の全体構造を明かにしようとした。第一次の調査では発掘地域がちょうど近年まで畑作をしていた場所で比較的発掘し易かったのであるが、今年の第二次調査は昨年の調査時に杉林を伐採した場所であるため抜根に手間取り、作業の進捗が思わしくなく苦しい発掘調査となった。

4. 検出した遺構

当遺跡は上下二枚の文化層があり、第一層は地表より約30cm、第二層は地表より約60cmに認められる。第一文化層からは土器片・石器等の出土が多く、第二文化層との間には遺物の出土は少なく、第二文化層になると第一文化層ほどではないが遺物の出土を見る。

現在までに検出された遺構としては炉址、柱穴、土壇である。住居址の周壁が連続して発見することが出来なかったが、土色の異なる高まりのある地点を結ぶことによって住居址の範囲を認めることの出来たことは幸であった。炉址を取り巻く柱穴と周囲の高まりから、8戸の住居址と推測されるものを検出した。(第3図参照)尚、第二文化層の遺構は目下3戸の住居址の精査を進めている。

第2図 発掘地区分布図



5. 出土した土器

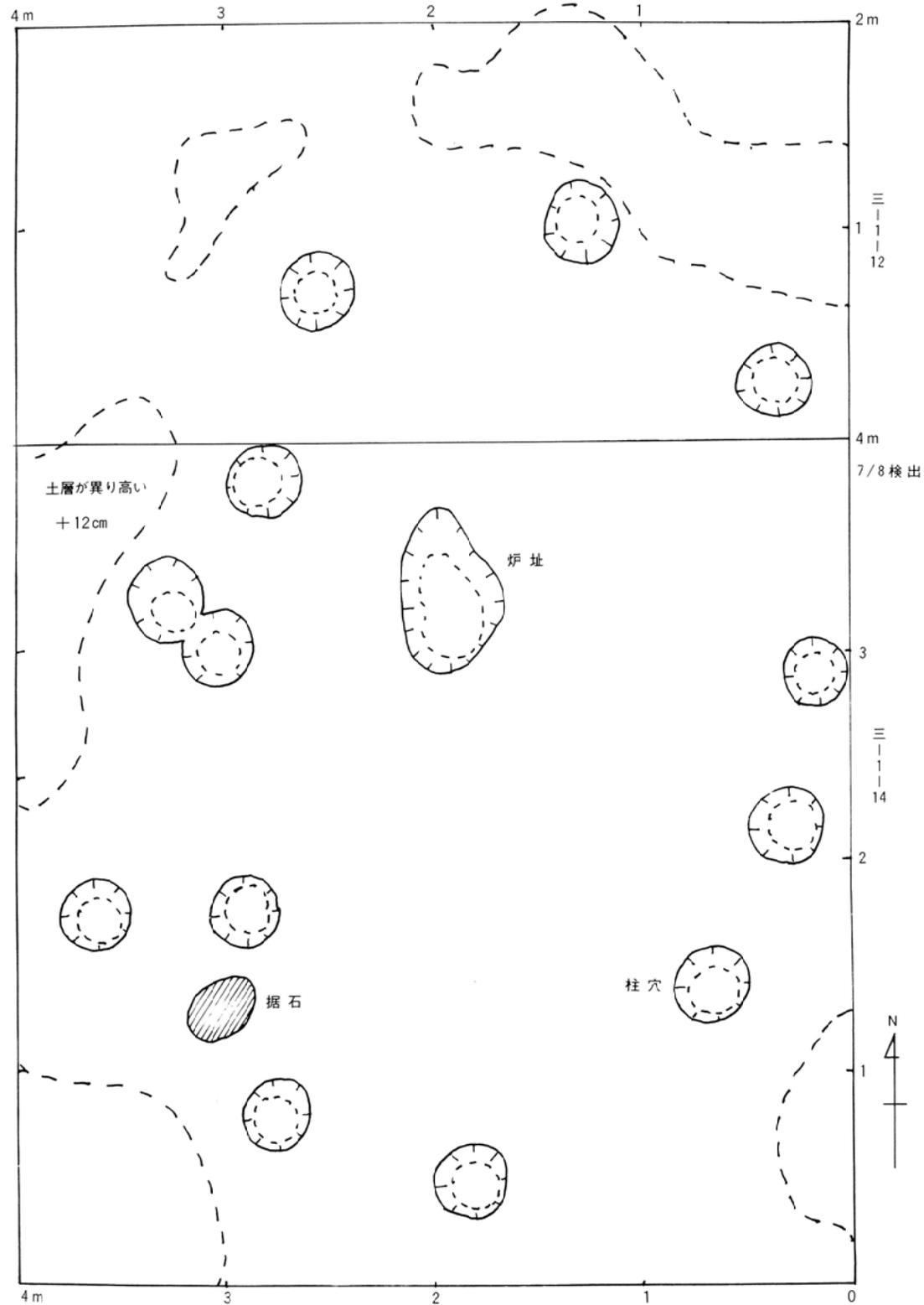
土器の出土状況は第一次の一一四一、一一五一、三九一、三一〇一のような各種形式の土器が累積した状態で発見されるようなことはなく、三一―16、三一―17、三一―2―13、三一―2―16、四―1―1、四―2―2、四―4―2の各坪からは比較的多くの土器片がまとまった形で出土している。

器種の多くは鉢形のもので、中には浅皿状の底をもったものも出土している。文様はいろいろで、無文、爪形文、竹管文、半截竹管文、粘土紐貼付文、刺突点列文、沈線文等々、夥しい種類がある。三一―1―16で深さ63cmからは炉址の側から上半分が切断された形の土器が出土し、また三一―2―15の炉址の中に23cmの口径をもった胴張りの土器などが出土している。(図版1―(3)・図版2―(1)・図版3―(3)・図版4―(1)参照)

6. 出土した石器

今回の出土した土器は、第一次の石鏃や石筈のような小型のものよりも大型のものも多く出ている。小型のものでは石匙の出土は極めて多い。石鏃、石錐、石筈、石匙、石槍、打製石斧、尖頭器、削器、彫器、凹石、磨石、石皿、礫器、砥石、磨製石斧、飾石、石球、石棒などが出土している。母岩としては頁岩、鉄石英、凝灰岩、砂岩、まれに黒曜石が見られた。(図版2―(2)(3)・図版4―(2)(3)参照)

第3図 住居址平面図
(上層) (地表面より36cm下)



7. 出土した礫・その他

礫の出土も多く、また当時の床面に据えられたと思われる円盤状の石や円形の石、楕円形の石などが多く出土した。また、夥しい礫の出土を見た。第一次では残滓と思われた不明の木の实や枳くろみが出土したが今回は現在までまだ出土していない。

8. 調査のまとめ

目下発掘中でまとめまでには到らないのであるが、大木5式の土器の出土する第一文化層の下に第二文化層があるところから、この間にどのような関係があるか興味ある問題である。今後の取りまとめの段階で、慎重な検討が必要であることを提示してまとめとした。



◀ (1) 遺跡の地表面と発掘作業
(南より北方を)



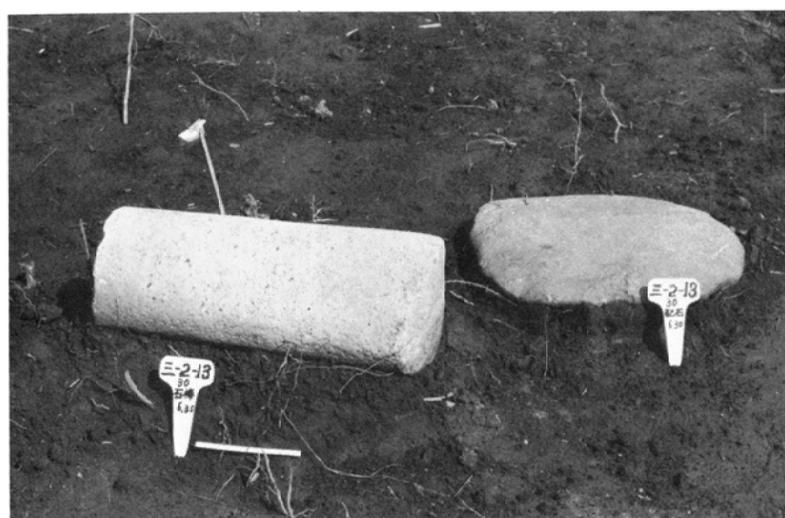
◀ (2) 遺物の出土状況
(三-2-15)



◀ (3) 土器の出土
(右に炉址がある)



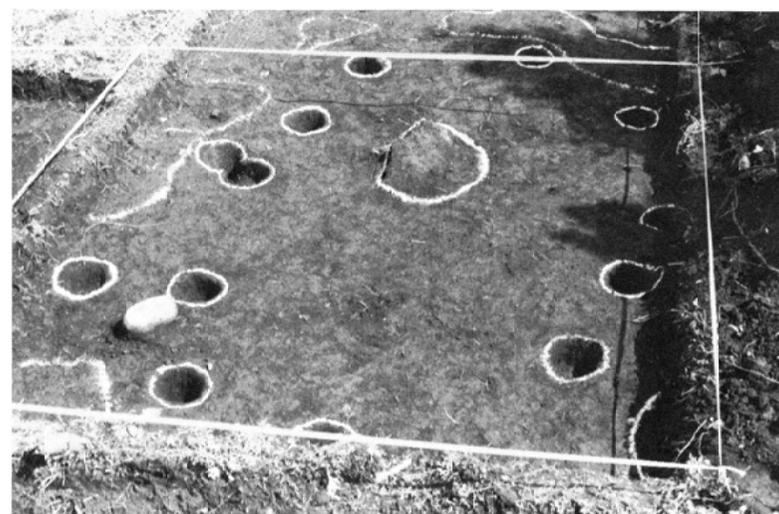
◀ (1) 土器の出土



◀ (2) 石棒と据石の出土



◀ (3) 磨製石斧の出土



◀ (1) 遺構の検出
(三-1-12)



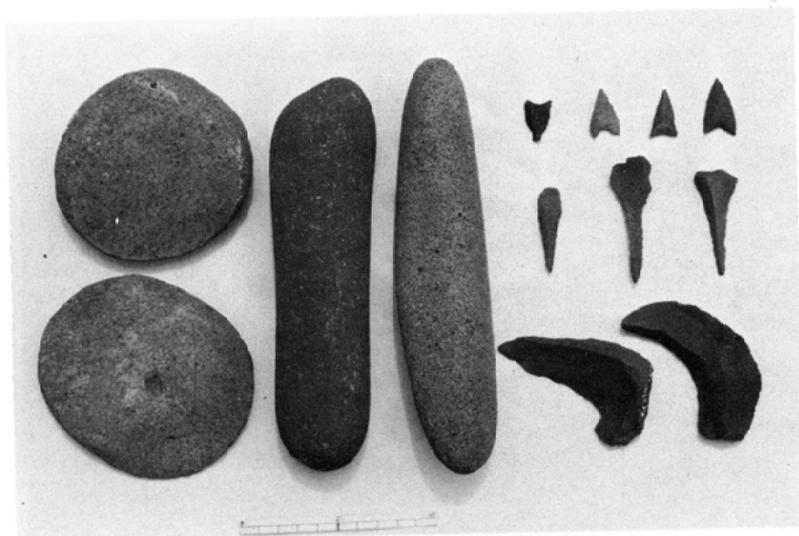
◀ (2) 遺構の検出
(三-2-13)



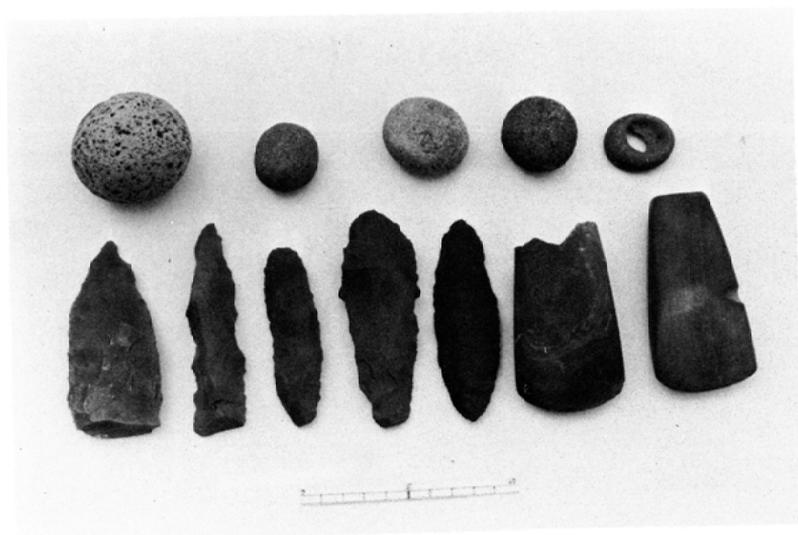
◀ (3) 出土した土器片の文様



◀ (1) 出土した土器面の文様



◀ (2) 出土した石器類



◀ (3) 出土した石器類